
竹田と竹田と俺、竹田。

蒼衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竹田と竹田と俺、竹田。

【Nコード】

N0943Y

【作者名】

蒼衣

【あらすじ】

俺こと竹田祐一（二つ名・孤高の狼）は叫んだ。

「くそっ……、これが小宇宙^{コスモ}の力……！ 確かに強い。だがこんなところで俺は終わらない！ 見ろっ、俺の全力——」

「お前、いたいぞ。それになんだその中二設定」

はい、という訳ですいません。嘘です。調子に乗ってました。

この物語は「イラスト挿絵ありの学園ギャグ」です。ほんとに残念な感じの話ですが、どうぞ個性溢れるキャラたちが送る日常を覗いてみてください！

サブタイトルに#があるものに挿絵があります。

表紙イラスト

俺竹表紙イラストです！

ジョンです。

可愛いイラストありがとうございます！

> i 3 4 6 1 7 — 4 1 1 9 <

イラスト：涼奈さん

*** 絵師さん紹介***

pixivやニコニコなどで活動されている絵師さんです。

pixivページはこちらです↓
《<http://www.pixiv.net/member.php?id=2964574>》

ちなみにこの表紙は何回も書き直されたそうです。

「すいません……」by 涼奈

（涼奈さん）「どうも！ 底辺絵師の涼奈です！」

(蒼衣) 「いや、それ違うだろ！」

自分と涼奈さんはこんな関係です。

例えばこんな設定があるでしょう。

季節外れの転校生の男の子いるとする。その人は……なんかこうかつこよさげで、いかにも主人公的雰囲気身を纏っている。そうだな、爽やかでかつこいい少年であるということも追加しておく。

新しい高校生活。

目の前には新たな開かれた学校生活。

さて、こんな設定があるとしたら、この男の子はたしてどんな生活が待っているだろうか？

……ふっ、そんな問いは愚問だ。

答えはもう、あれしかない。

言うならばライトノベル的展開――

そう、

これから美少女と仲良くなるハーレムイベントが待っているに決まっているのだ！！

絶対そうに決まっている！

だってライトノベルで、今まで転校して美少女と仲良くなならない主人公なんか見たことないんだからな！

何かしら可愛い女の子と関係を持っているからな！

だからその男の子にだって幸せがやってくるに違いない——と、俺こと竹田佑一は竹取学園に転入生として新たな高校生活を始めるために、学園へと第一歩を踏み出すのであった。

四月下旬。

窓から新緑の木々が見え、木漏れ日が廊下を鮮やかに映し出す。木には小鳥が二羽寄り添って歌を奏で、リスは大きなしっぽを動かしながら器用に動き回っている。

四月の風は、朝は肌寒いが、何故かほんのり暖かさを感じる。

そんな『竹取学園』のとある廊下にコツコツと二つの足音が響いていた。一つは俺のもので、もう一つは俺を教室に引率する担任の男のものである。

朝の連絡時間であるSHR少し前くらいの時間であり、今は廊下には他に誰もいない。

……いや、まあそれはいいのだ。
そんなことは重要なことではないのだ。
聞いて欲しいことがある。

それはこの学園は何かしらおかしい、ということなのだ。

一つ目はこの学園のシステム的な面についてだ。

この学園はなんと、校長先生と理事長が老人の夫婦であつたりする。ちなみに俺がさっきまで話していた校長先生の方はおばあさんで、理事長の方はおじいさんである。

どこの童話だ！

というツツコミをしたくなるほどで。

いや、今のツツコミは変か。俺のツツコミスキルもまだまだなと自己反省をする。

しかし、だ。

このふざけているような竹取学園は実はとても名門だったりする。なにせ創立されたのが平安時代だとかないとか。

昔からある高校で、それなりに世間に名が通っている。もう驚きものだ。

さて、そこはまあしょうがない。

そんな意味の分からない学園があるのは理解できる範囲だとしてもだ。

俺のこの担任はおかしいと思う。

今までの中でも範囲外だ。

それは……

「竹田君、そろそろ教室に着きマスヨ？」

ニコつと笑顔で俺に話しかけてくるこの担任が竹本マイケルだ、
と言う事だ。

竹本マイケル。

金髪碧眼の名前通り外国人っぽい顔で、体つきがマッチョで、
しておっさん。

まず第一におかしいところは生徒着用の制服を着ているところだ
ろう。

第一ボタンは開けているもののきつちりぴつちり着ている。
はつきりとは言えないが、とにかく確かなのはキモいということ
だ。

ひげが生えたようなごつい顔で、初めてあつた時に、

「こんにちハ」

なんて言われてしまえばこの学校の印象がガラリと変わること間
違いなし！

そして二つ目におかしいところは、この竹本マイケルが担当して
いる教科にある。

普通外国人なのだから担当は英語だろ！ と思う。

だが竹本マイケルの担当は理科で、そして化学が得意なのだとい
う。

ここでもし担当が国語ならば、
なんで国語なんだよ！ 意外すぎるわ！ と言えたかもしれない。
しかし理科。よりにもよって理科。
あまりにも微妙すぎて聞いた瞬間に言葉を失い、そして心中で、
微妙すぎるチヨイスだわ！ とつつこんだことはつい最近のよう
に思える。

まあ事実今朝のことなのだが、それは気分的な問題で。

とにかくここはおかしな学園なのだ。

それだけは確信を持って言える。

なんとたつて俺が竹取学園という言葉聞いて思った第一印象が、
もしかして校舎が緑色で竹でできているのかな！？ なんて思った
くらいなんだからな！

…… え、変？

その印象の抱き方間違ってる？

まあそう言うな。一部の人がたつて同じ事を考えているに決まってるさ。

…… 思わない、だつて？

そう考えるのはごく稀なことだつて？

… またまた。俺は普通の一般人なんだからそんなことあるわけ
ないじゃないか。

うん、無いよね？ 俺ほんとに普通の人だよ…？

「竹田君、僕は先に行きマス。呼んだら入ってきてくだサイネ」

そんな事を考えていた時、例の竹本マイケルに話しかけられた。いつの間にか目的の教室に着いていたのだ。

俺は何も言わず首を縦に振るだけで分かった、の意を伝える。その反応を見て、竹本マイケルがニコツと笑い、教室の中へと入っていった。

……相変わらず慣れない笑みだった。

うむ、えーと気を紛らわせるために新しいクラスについて考えようかな。

『2 - 6』——そんなプレートがついている教室を見る。

ここが俺の新たなクラスとなる。

まず俺は季節外れの転校生だ。

というか親の仕事の都合だからしょうがないが、四月下旬の転校ってなんだ。

時季外れにも程がある。仕方のないことだけれども……。

だが！

これにより発生するイベントがあるではないか！

そう、お約束中のお約束。

美少女達との順風ライフさ！！

そうなのだ、転校初日に隣の席に美少女がいて、

『こんにちは！　これからよろしくね！』

とか言われちゃうんだ！

そうに決まってる！　むしろそうならいいとおかしい！

そしてさらに高校生活を過ごすとなんやかんやで美少女が俺の元へ集まってきて、そこでラブハプニングとか……！

あんなことやこんなことが……！

転校生とはそういうものだろう！

ふう、教室に入る前から興奮してきた！

早く来ないかな！ 俺の幸せライフ！

ガラ、とその時教室のドアが開いた。

「おや、竹田君。入る前からそんなに鼻息を荒くしてどうしたんだス力？ 牛デス力？ 闘牛にでもなるつもりデス力？」

ドアを開けて教室から出てきたのは、竹本マイケルだった。

いやいやいや、そんなわけがない！？

闘牛ってどういうことよ！？

逆に人間って牛になれるの！？ 頑張れば闘牛にでもになれるの！？

そう言いたかったがここはぐつと堪える俺。

だってこれから俺には順風ライフがやってくるんだからな！

こんなところでキレちゃ駄目だ。

ここでむやみに声を上げて、教室にいる生徒達の好感度を下げ
わけにはいかない！

「いえ、違います。ちょっとこの周りだけ酸素が少なかったのだから」

ってなんだこの俺の言い訳。

小さい声で言っただけからクラスメイトには聞こえてないものの、アホだな、俺の言い訳。

チツ、マイケルが相手だからと思って油断してしまった。

さて、マイケルはこれにどう返すのだろうか……。

「そうですか。竹田君、大変でしたネ」

予想外に受け入れられた！

「今みなさんに転入生がいるということは伝えマシタ。さあ竹田君、入ってくださいサイ」

……なんか釈然としなかったが、俺は言われた通り教室に入ることにした。

ガラッとドアを開け、中に足を踏み出す。

するとクラスメイト達の視線を一身に受けた。

やはり生徒達にとって転校生とはめずらしいものであるらしい。

俺に再び緊張が走る。

そうだ、これからする自己紹介がみんなの俺の第一印象となるのだ。

今後の俺の高校生活を大きく左右する。

俺にとっては大切なイベントだ！

失敗したら幸せマイライフが遠ざかってしまうかもしれない。

そんな状況は断固として阻止してやる！

凄まじく強烈にかっこよくて、漫画でいうキラキラが入るような、素晴らしい自己紹介をしてやるんだ！

俺は表面には出さないものの、心を燃えたぎらせる。
よし、いつでもかかって来いやあ！

「それですネ、この人がその新しい転入生デス。今その人の名前を書きマスネ」

気がつく俺の自己紹介の時間がやってきたようだ。

竹本マイケルが黒板に俺の名前を書こうとチョークを探す。

……よし、今のうちに気を落ち着かせよう。

冷静に、冷静に――

「あら、白のチョークがないデスネ」

用意しとけよおおおおお！

出鼻をくじかれた気分なんですけど！

何この竹本マイケル！

わざとか！？ わざとやってるんじゃないだろうな！？

「すみませんエ。深緑のチョークで書きますネ」

見えなくない！？

黒板と同じ色のチョークで書いても文字、見えなくない！？
というかわからないのにその色のチョーク、何であるんだよ！ 必

要ないだろ！

この学園おかしいって！

もしかしてこの学園の名前が竹取学園だから、それにちなんでいるのか！？

そんな風に俺が混乱していた時、竹本マイケルが何かに気づいたように声を上げた。

「あら。頭の上にチョークがありました」

灯台もと暗し！？

「すまんのお、竹田君。これから黒板に君の名前を書くけん、待っててくれるかいな」

急に口調が変わった！？

日本にめっちゃ慣れてるんですか！？

あとさっきのボケにスルーしてしまったが、何で頭の上にチョークがあるんだよ！

意味不明すぎるわ！

……おつとつと、いけないいけない。

このツツコミは口に出さないようにしよう。変な子だと思われたくないからな。

そんな俺の内心のつつこみなんて露にも気づかず、竹本マイケルは俺の名前を黒板に書き始めた。

もしかしてノリで俺の名前を間違えて書くかもしれないので、と俺はじつと竹本マイケルの手元を見る。

……うん、ちゃんと名前は書いていた。よかった。

まあ竹田の田の字が若干甲に字に見えないこともないが、口で説

明すればいいか。

「では竹田君。自己紹介をお願いシマス」

文字を書き終えた竹本マイケルに促される。

緊張した面持ちで俺は頷いた。

この自己紹介、なんとしても成功させてみせる！

俺の幸せライフを賭けて……！

そう意気込んで、すうっと息を吸ってから、俺は言葉を発した。

「みなさん初めまして。俺はここに新しく転入した竹田佑一です。よろしくお願いしましゅ」

最後に囃んでしまった！

沈黙していた教室にくすくすと笑い声が洩れる。

……穴があつたら入りたいとは、まさにこのことであろう。

「さて自己紹介も終わったところで、竹田君には一番後ろの窓際の席に行ってもらいマシヨウカ」

竹本マイケルに言われた瞬間、俺が自分の席になるであろうところに視線を移した。

そうだ。

自己紹介にはちょ——つと失敗したけど、まだ隣の席の人が美少女であるというお約束が残っているではないか！

希望はまだ捨ててはいけない！

俺はじつと一番後ろの窓際付近に目を凝らした。
すると……

> i 3 3 8 8 3 — 4 1 1 9 <

冷淡な憂える表情をしてぼんやりとしている女の子がいた。

深い色の短い黒髪に、整った顔、クールな切れ長の瞳を兼ね備え、物憂げに溜息を一つ落とす。廊下から入ってくる木漏れ日を受けたその様子は、さながら芸術作品の完成された絵のよう。

俺は今が自己紹介中であるということも忘れ、ただただ目を奪われる。それくらいにその子は美少女であったのだ。

「……………」

しばらく見とれていたが、次にははつと意識を取り戻す。
そして改めて、今の状況に嬉しさをかみ締めた。

キタ——！！

俺の時代がキタ——！！

なんとなんと、俺の席の隣に美少女！

俺は内心で大きくガッツポーズをする。
めっちゃ近くじゃないか！
お約束バンザ——イ！

一通り喜びを感じてから、再度その子の姿を確認する。
その子は肩までのショートヘアの髪はぼさぼさしているが、艶やかでいかにも日本人という色をしている。

そして多分この学校指定であろう上下緑色のジャージを着ていた。

あれ？ 他の子は制服を着ているのになんでこの子はジャージなんだろう？

服が濡れたとかそういうのかな？

まあいいか！

美少女なんだ、そういうのは関係ないさ！

でも欲を言うとジャージをもう少し可愛くしてほしかったかな。
竹取学園だからかもしれないけれど、ジャージ上下が緑でもうちよつと工夫を凝らしてもよかったんじゃないかな…。

「じゃあ竹田君は動いてくだサイ」

俺はマイケルに言われて、マツハで自分の席に移動した。
だって少しでも早く美少女のところに行きたいもんね！
あ、今きもいと思うのはなしの方向でお願いします…。

S H R 後、

俺は早速隣の子に話しかけることにした。

よっしゃ来たああ！俺はこの時を待っていたのだ！

俺の恋愛フラグを立てるときがやっと来たあ！

ふっ……、みんな見てなよ！

俺の幸せライフの華麗なる幕開けを！

「ね、ねえ君」

「ん？」

俺の呼びかけに気づき、つまらなそうに頼ずりしていた少女はこちらを向く。

……やっぱり可愛いな。

目も大きくてぱっちりしてるし、まつげは長いし…。

ってそんな事を考えている場合じゃなかった！

俺はこれからこの子にフラグを立て、いや、話しかけるんだった！

やっぱりここはこの子の名前を聞くのが筋というところだろうか。そこで俺も自分の名を名乗って、

「あ、佑一くんって言っただね！じゃあわたしは佑一くんって呼ぶね！」

みたいなことになるんだよね！

うへへ……、いかん、よだれが垂れそうだ、自粛しないと。

俺はそんな幸せな会話を頭の中で思い浮かべながら、その子に名前をきいた。

「あのさ、君の名前ってなんていうのかな？」

さあ来い、ウツハウハな俺の生活！

するとその子は俺の期待を余所に、こつ答えた。

「わしか？ わしの名は竹田ジョン」

.....。

男おおおおおおおおお！？
え、嘘う、男だったの！？

.....。

.....。

.....さらば、俺の幸せライフ。

.....さらば、俺のウツハウハな生活。

そして俺は灰と化した。

♪♪♪

クラシックの音楽が鳴る。

校内放送で流れている。

確かこの曲はベートーベンの……

はっ！？

とそこで俺の意識が戻った。

どうやら俺はショックを受けて、意識が飛んでいたようだ。

教室の前の壁についている時計を見る。

今は八時四十分の二分前だった。

さっきクラシックが流れたのは、生徒達に授業が始まることを知らせる予鈴だったようだ。

俺の予想は正しいらしく、実際にクラスメイト達が次々と音を聞き、自分の席に着いている。

授業の開始は四十分。

この学校の予鈴は二分前。

よし、覚えたぞ。授業に遅れないようにしよう。

さて、そんな風に考えていた時だ。
ガタ、と隣の椅子が動く音がした。

隣に顔を向けると、そこにはあの竹田ジョンが椅子を引いて、腰を下ろしたところだった。

どうやら竹田ジョンは前の席のロングヘアの女の子と仲が良かったらしい。

二人で先ほどもどこかに行っていたようだ。

ああ、竹田ジョンはなんて可愛いんだろう…。

こいつ、ジャージ姿だけどそれさえもまるで衣装のように栄えるなあ…。

いいなあ……。

ん……？

んん………？

長い沈黙をして、そしてはたと気づく。

あああああああ！！

思い出した！ 今さっきあった会話を思い出した！
そついやこいつ、竹田ジョンは男だった！

俺は記憶を取り戻し、わなわなと震える。

美少女ではなく美男子だった奴だ！

くそう、こんなに可愛いのに女の子じゃないなんて！
しかもお約束がお約束ではなかったのだ！
普通にここは美少女が来るところだろう！

俺は頭を抱えて、内心では吠えまくる。

何だよ、もうライトノベル的話にあるまじきだよ！

まあ竹本マイケルって奴がいる時点であやしいなとは思ってたけども！

ちよつと、あれ、これ、違うね？ とか思ったけども！

この俺の怒りは一体どこにぶつければいいんだああああ…！

竹田ジョンとか…！ 竹田ジョンとか……！

「あれ…、竹田ジョン……？」

そこで俺はふと動きを止めた。

え、ジョン？

この子の名前って竹田ジョン？

外国人なのか？

気になってちらりと隣を見てみた。

……が、どう見ても外国人っぽくは見えない。髪は黒だし、顔立

ちも純日本人っぽいし。

じゃあ何故竹田ジョン？

なにか深い理由でもあるのだろうか。

俺はちよつとそれに興味を持った。

ま、いわゆる好奇心が芽生えてきた。

せつかく席隣なんだし、訊くくらいは訊こうかな。

時計の針を見て、まだ授業が始まるまでに時間があるのを確認してから、俺は隣の竹田ジョンに声をかけた。

「なあ、おい」

「……。」

「おいってば」

「……………」

「竹田——、竹田ジョン——」

「ぬ？」

三回呼びかけて、やっと気がついたようだ。こちらを見る。
やっぱり可愛い。ああ、もったいない。もったいないよ。

こんな美人なのに、これで男とかもったいないよ！

「どした？」

はっ、と声を掛けられ俺は正気に戻る。

今はそんなことを考えている場合ではなかった。

それに今更性別を悔やんだところで仕方のないことだろう……。

…さて、知リたかったことでも訊くか。

どうせ男同士なんだ。仲良くやりたいしね。

「ねえ、君ってさ」

「？」

「名前、竹田ジョンなの？」

「……………。うん……………」

応えるのにまた随分と時間がかかった。

なんだ、言いたくないことなのか。それとも本当に何か海より深い理由があつて？

うわあ、まずいこと訊いちゃったかな…。

もしもそうならば、謝らなければならぬだろう。

「ごめんな、変なこと訊いて」

「うっん、別に平気だ。気にはしてるけどな」

気にはしてるんだ。

じゃあ全然平気じゃないじゃないか。

内心でつつこみを入れる。

もう少し俺が会話を続けようと口を開きかけた時。

♪♪♪

授業の開始を告げるチャイムが鳴り響いたので、俺は話しかけるのを止め、それは次の休憩にでもしようと脳内チェンジをした。

だがしかし……！

チャイムが演歌っていったいどういうことなんだ……！

予鈴はクラシックで何故チャイムは演歌なんだ……！

意味が分からなすぎる……！

俺は焦ってクラスメイト達の姿を見ていた。

だが誰しも教科書を用意したり、号令をするために椅子から立ち上がったかとして、まったく動揺する素振りを見せなかった。慣れているのかむしろこれが当然だと言わんばかりに。

あの……、

俺、ここで上手くやっていける自信ないです。

そんな俺の一回目の授業開幕であった。

『枕草子』——そう黒板の端に今日の授業の題材が書かれている。
そしてその通りに、一限目の授業は古典であった。

古典の先生は白髪でよぼよぼ、腰が曲がったおじいちゃん先生で、
今も震える手で黒板に字を書いている。

……大丈夫なのだろうか…。

この先生とは初対面だが、心配をしてしまうほどであった。

というか何故この学園はそんなおじいちゃん先生を雇ってるんだ

…。

訳は分からなかったが、もはや今更つつこむ気も起こらなかった。
まあこの学園自体おかしいしな…。

それは置いておくとして、今俺は切羽詰まった問題があった。

なんと転入初日に、教科書を忘れてしまったのだ……。

……うん、分かってるさ。俺がバカだって分かってるさ。
分かっているのだ。

というか持ってきた鞆が「あれ、何でこんなに軽いんだろう?」
とか思った時に気づかなかった俺がいけないのだ。

…ああ、どうしような、マジで……。

俺は隣の席をちらりと見る。

竹田ジヨンは…、一緒に見せてくれるだろうか…。

あやしいなあ…、ていうか俺が勝手に苦手意識を持ってしまっているのだ。

だって女の子だと思ってたしなあ…。

だがここでめげないのが俺！

きっと竹田ジヨンであろうがどんな人であろうが、困っている人がいたら見て見ぬふりなんかできないはず！

それに転校生の俺の事情は分かるはずだから、きっと快く見せてくれるよね！

「あ、あのさ、竹田ジヨン」

一応授業中ということもあり、俺は小声で話しかける。

「ん。なんだ」

幸いにもすぐに竹田ジヨンは気がついてくれた。

俺はそのまま交渉に入る。

「俺さ、教科書忘れちゃったんだ。だから見せてくれたら嬉しいな
く、なんて…」

「……む」

すると竹田ジヨンは思考のポーズをとる。その間一秒。

「嫌だ」

「なんで!？」

きれいさっぱり切り捨てられてしまった。

「なんでって……、おまえ、変な考えしてそうだから、近寄りたくない」

「……………」

指摘されて否定できない自分がいた。

「ほらな。沈黙ってのは肯定だろ？」

「ぐっ……、そ、そんなことはないってば」

「ほんとか？」

「いや、でも今回はほんとうに違うんだって！　今回はリアルに困ってるんだって」

「今回は？」

ジト目で竹田ジョンに見られる。

…あ、なんか墓穴掘ったね、今。

うん、俺あまりにも素直すぎたからね、嘘が言えないんだね、あはは…。

なんて痛々しい笑いをしながら、それでも俺は粘る。

「でもこれは授業に関係のあることなんだ。だからこの通り、な？」

俺はおじいちゃん先生に見えないように小さく手を合わせる。

ふう…、そんな俺の様子を見て竹田ジョンが小さく溜息をついた。

「しょうがないな、まったく…」

了承を得ることができたみたいだ。

よかった、これで今日の授業はなんとか凌ぐことができそうだ。
そう俺が胸をなで下ろしていると、

「三秒だけだぞ？」

やれやれと竹田ジョンが言う。

「うん、ありがとうね。……って三秒だけ！？」

驚愕の出来事に俺は目を見開く。

「それ何も見えないよね！？ 三秒で得られるものってないよね！
？ あと何でお前のために折れてやったよ的な態度なんだよ！ 全然折れた範囲じゃないよ！」

「文句言つなよな」

「そりゃあ確かに見せて貰う分際ですけど！ でも三秒はあんまりじゃないでしょうか！？」

「あー、もうおまえ面倒だな……。しゃーないなー」

そして竹田ジョンは渋々というように机を俺の席に近づける。
嫌々ながらも一応は聞いてくれるんだ…、まあ助かるけどさ。

「ほら」

そして二つの机の真ん中に教科書を持ってくる。

「ああ、ありがとう——」

と俺が教科書に顔を覗き込ませようとしたら、

ちらっ パタン

「……………あの…?」

コンマ三秒くらい開いてから、竹田ジョンが開いていた教科書を閉じた。

俺は呆然として竹田ジョンを見ると……………。
してやったりの笑みを浮かべていた。
…ほんところ、悪ガキみたいな顔で。

う、うぜええええええ……………。
竹田ジョンウザイよ…、精神年齢が低すぎるよ…。
それして喜んでるのって小学生くらいなんじゃないかな。

この竹田ジョンという奴は…。
だがしかし、このような相手だからこそこちらが大人にならなければならぬ。

そうさ！

俺が紳士な態度で接してやればいいのさ！
まったく、しょうがないなっ。

俺が手で髪をふつと揺らすと、隣の竹田ジョンが「おまえ、きもいな…」と言っていたが、それはこの際聞かなかったことにしよう。

「なあ、竹田ジョン。ここは一つ仲良くなろうじゃないか」

俺は プラン１、竹田ジョンと仲良くなろう！ を実行することにした。

友達になればそんなの関係無しで、友好的に教科書の見せ合いっこもするよね！ という俺の単純思考からやってきたものである。

「ふうん。そつちから言ってきたってことは、当然それに見合った対価もあるんだろうな？」

「……え？」

なに…？ 対価だと…？

友達というものはいろいろ…、こう友好イベントをクリアしていつてそして友情が生まれるものだ。それが俺と竹田ジョンにはまだ、ない。

つまりすぐに友達になると言うには、なにか相手にもメリットがなければならぬ。

…俺としたことが失念していた。

どういつて納得して貰おうか……。

「え、えーとね…」

「お金か？」

「……お金ですか？」

「うん、マネーだ、マネー」

「……ちなみに竹田ジヨンはそれほどがご所望で……？」

「そうだな、一億くらいかな」

「高っ！」

お前は自分をどれだけ高くみてゐるんだ！

俺は冷や汗を浮かべながら、他の説得を試みる。

「お金はやめてさ、食べ物にしようよ。コンビニで買えるやつ」

よし、これならいくら高かったとしても、俺でも大丈夫なはず…。

「じゃあいかさき100こ。ダッシュで今すぐ」

「今すぐ!？」

「そうだ、タイムイズマネーだ」

「いやあ、だって今授業中だよね……？」

「そうだが？」

平然と竹田ジヨンが言う。

俺に授業をサボって買いに行けと言うのか……！

このプランは難しいと痛感した…。

さて次は プラン2 褒めて相手をその気にさせよう！ である。
そうさ、人は誰しも褒められると相手を許してしまいがちなのだ。

つまりそれは竹田ジョンも例外ではないはず！

「やあ、竹田ジョン。今日もきみは見目麗しいね！」

「そうか」

「みんなの注目の的だね！」

「そうか」

「きみくらいに素敵な人はいないよ！」

「ふーん、ふわぁ……………」

「俺も君を尊敬するね！ 君みたいになりたいな！」

「……ZZZ」

もう竹田ジョン、最後の方寝てるし！

聞いてさえないし！

というか今時そんなZZZなんて眠り方ないだろう！

このプランは難しいと痛感した…。

最後は プラン3 もうとことんお願いをしよう！ である。

もうネタが尽きたんだ、深くは追求しないで欲しいかな！

だってどんな人だって、人のお願いをむやみには断れないよね！

（さっきは竹田ジョンに一蹴されたけど…）

今度は本気で魂がぶつかるようなそんなお願いをすれば、さすがの竹田ジョンだって心にこう、来るものがあるはずである。

俺はおもむろに立ち上がり、大きな声で竹田ジョンに言う。

「お願いだ、竹田ジョン！ 見せてくれないか！」

そして頭を下げる。

これだけ誠意を持った態度をとれば、竹田ジョンも断れないはず

…！

次に来るであろう反応を待つと…、

「君たちは授業中に何をしてるんじゃない——！」

あら不思議、別の人割り込んできた。

…というか普通に古典のおじいちゃん先生だった。

あ、今授業中だったね、忘れてたね…。

突然生徒が立ち上がり、叫んだものだからクラスと人たちも驚いたような顔をしてこちらを見ていた。

特におじいちゃん先生は授業の妨害を受けたからなのか、怒っているようである。

「君たちはこのっ——」

そしておじいちゃん先生がこちらに向かって手を振りかぶろうとする。

あ、これはもしかやチョークを投げられる…！

俺がとっさに身構えると、

スポ——ンッ

「え？」

スポ——ンッ……？

何の効果音…？

不思議に思っただけを確認すると、
端的に言つとおじいちゃん先生のものらしき入れ歯が、竹田ジョンの頭の上に乗っていた。

入れ歯、飛び出てますけど——！！？

「も、もが…」

入れ歯が無くなったおじいちゃん先生は、口をもがもが動かしている。

さっき勢いよくこちらにチョークを投げようとしたら、その拍子に入れ歯が飛び出たようだ。（どんな拍子だ……）

驚いて、というか呆れてものが言えないでいると、次に動いたのは竹田ジョンだった。

「なんだ、これ。汚っ」

うげ、としかめっ面をして竹田ジョンは頭の上の入れ歯を触る。
確かに今飛び出たものだから生々しいだろうけど…。

その時、俺が教室前方にいるおじいちゃん先生を確認すると、

「うう……」

おじいちゃん先生が泣きそうだった！

汚いと言われてしまい、おじいちゃん先生に心の傷が…！
しかしそれに気づかない竹田ジヨンは言葉を続ける。

「きもちわるいな、これ。触りたくないぞ」

そう言つとさらにおじいちゃん先生の目に涙が溜まってゆく。

「なんだ、入れ歯か？ うわあ、ベトベトじゃないか」

竹田ジヨンはぺっぺと汚いものを扱うような素振りをする。

「ううう……」

おじいちゃん先生の心にどんどん亀裂が走っていく。

もつやめて！

おじいちゃん先生が可哀想！

竹田ジヨン、同情はするけどやめたげて！

でも俺の心の声が聞こえるわけでもない竹田ジヨンは、

「ふん、こんなものは、ぽーいだ」

窓から外に入れ歯を投げた！
しかもやけに華麗なフォームで。

キラ——ン

そして入れ歯が空の星になったとき。

…もう俺、知らね。

晴れやかな表情で俺は思うのであった。

> i 3 4 4 1 8 — 4 1 1 9 <

その後の展開は言わずもがな、

俺と竹田ジヨンは国語科のチーフの先生にみっちりお説教を喰らい（おじいちゃん先生はあまりに心に傷を負ったため、トイレに引きこもり泣いているらしい…）、一限みっちり入れ歯搜索を行った。そもそもの事の発端である、俺が教科書を忘れて竹田ジヨンに見せて貰うということを聞いた国語科のチーフは、「お前等、そんなことで…」と呆れて、竹田ジヨンに俺に教科書を見せてやることを約束させ、事を終えた。

竹田ジヨンは嫌そうだったが、先生が言ったことなので拒否するわけにもいかず、俺はやっとのことで教科書を見せてもらえる事になったのだ。

だが、その代償があまりにも大きかった気もするけどな…。

おじいちゃん先生、大丈夫かな。

復帰できればいいんだけど…、と願わずにはいられない俺だった。

授業二限目の最中、もやもやした頭で俺はあることを思いついた。そもそも俺がもやもやしていたのは、竹田ジョンの事なのだ。竹田ジョンが教科書を貸してくれなかったせいで、結局一限まるまる入れ歯探しに使わされてしまった。それだけならまだいいものの、初日だというのにクラスメイトから浮いてしまい、教師達からは目を付けられる始末。

はあ…、溜息をついて窓を見——ようとして、ふとそこで思いついたのだ。

そうだ！

竹田ジョンの弱味をこちらが握ってしまえばいいんだ！
そしたら、こんなことされずにすむよね！

俺はいかにもな悪人面でうししと笑う。

さあて、見てろよ竹田ジョン。

いい気になっているかどうかは分からないが、偉そうな態度をしていられるのも今のうちだ！

三時間目の時間中、クラス担任でもある竹本マイケルが教壇に立っていた。朝の時と変わらず嫌にびっちりした制服を着て、教科書

を読んでいる。時折顔を上げてはクラス全体を見渡し、生徒に質問を出していた。

俺はその時間、いかに竹田ジョンに復讐するかを考えていた。竹田ジョンってなんか生態がよく分からないんだよねあ…。だから何するのが一番なのかとは分からないし…。

そしてちらりと横目で竹田ジョンの姿を確認すると、なんと竹田ジョンが熱心にノートを取っていた。

何、あの竹田ジョンが真面目に授業を受けている、だと…？それに少なからず驚き、動揺を隠せない。さっきまで見ていて、寝てるか、外を上の方で眺めているかだった竹田ジョンが、ガリガリとペンを走らせている。それも至極真面目な顔で。

一体何を書いているんだ…？

俺はおそろおそろ竹田ジョンのノートを盗み見をする。すると、そこには歪な形をしたミッキーマ。スがこちらに向かってピースをしている絵があった…。

……うん、見なかったことにしよう。

なにかいけないものを見たような気がする。

俺は心を無にして、自分の世界に戻ることにした。

「——であるからシテ——、なのデス。それで——」

先生の声が耳の右から左へ消えていく。

もはやその声は、俺の思考用BGMと化していた。

一応建前としてノートは机に置いて置いてはいるが、タイトル以外はなにも書き込まれていない。まあもし必要になったら、クラスの人に貸して貰おう。……貸してくれたららの話なのだが。

「——は染色体の中で使われているものは——。——竹田君、これはなんデスカ？」

「……え」

俺が名前を呼ばれていたことによりやく気づき、顔を上げると竹本マイケルが満面の笑みでこちらを見ていた。

冷や汗をかき、体を硬直させる。

しまった、当てられてしまった。

授業のことなど聞いてなかったので、当然答えなど分かるはずもない。

竹本マイケルは笑顔でこちらに答えの催促を促す。

……ど、どうしよう……。

どうやってこの窮地を抜け出せば……。

無い脳みそをフル回転させている最中、ひょうひょいと動くものが視界に入った。

そちらに視線を移すと、それは竹田ジョンの手で、こちらになにやら合図を送っている。口が小さく動いた。

『助けてやろうか？』

『え？』

どういう風の吹き回しなのだろうか。

竹田ジョンが自ら手伝い役を買って出てくれた。

今までの行動を振り返るとそれは怪しげな行動ではあったが、今は藁にも縋りたい状況なので、俺にとっては願ってもない事なのだ。よし、ここは信じてみよう……！

俺が小さく手を合わせて懇願をすると、竹田ジョンはぼそりと言

葉を呟いた。

『ダレイオス一世だ』

『分かった、ありがとう！』

教えてもらうと同時に俺はバツと顔を上げ、竹本マイケルを見る。そして大きく口を開いて、堂々と答える！

「はい！ ダレイオス一世です！」

「竹田君……、化学の時間になんでダレイオス一世が出てくるんですか……？ 人間の染色体の中にダレイオス一世が住んでいるのデスか……？ 僕はそれはとても怖いと思いマス……」

竹本マイケルに可哀想なものを見るような目で見られた。

これはほんとに心にグサツとくるものがあった。

隣を見る。

竹田ジョンがお腹を抱え、くすくす堪えた笑い声をあげていた。ち、ちくしょおおおおお……。

窓から入ってくる風が妙に寒く、心が冷たくなるように感じる。俺は本気で竹田ジョンをぎゃふんと言わせてやろうと、決めた。

そして三時間目化学終了後、十分間の休みに早速俺は行動に移す。
竹田ジョンに恥をかかせてやるのだ…！

この屈辱は忘れないぞ…！

作戦名は「バナナの皮で滑って転んだら痛いぜ！」である。

その名の通り、これからバナナの皮を竹田ジョンが歩く廊下にくっとう上手い具合に設置をする。ちなみにバナナはわざわざ購買で買って、食べてわざわざ用意したものさ！　すごいだろう、俺の執念！
わーはっは！　…このやる気が勉強だったらな、は言わないお約束さ！

おっと、そんなことを考えている内に竹田ジョンがこちらへ歩いてきた。

俺は俊敏に体を動かし、バナナの皮を何気なく落とす。ちなみに何気なくが重要なポイントだ。そしてサッと体を廊下の柱へ隠した。さあて、竹田ジョンはこの窮地にどう対処する…？

始め竹田ジョンはバナナの皮の存在に気づかなかった。だが距離が狭まるにつれ、あれ？　という顔になる。

まさか、…もうバレてしまったのか…？　緊張に唾を呑む。

竹田ジョンはバナナの皮の前で完全に立ち止まった。思案顔になり、持っていた小物が入るくらいの大きさの手提げバックに手を突っ込み、ゴソゴソと中身を漁る。

何をやってるんだ？　俺の方が訝しむ。

だがそれにもお構いなしで、竹田ジョンは何かを探す。そしてお目当てのものを探し終えたのだろうか。ふう、と安堵の息をついた。

「なんだ、これはわしのじゃないな」

お前は自分のバナナが盗まれたかどうか心配だったのかよおお！

「つか、お前はいつもバナナを常備してんのかよ！
どんな高校生だよ！」

俺は衝撃の事実を目を剥いた。
が、それも意に介した様子もなく、竹田ジョンは満足げに歩き去るうとする。

しかしその目の前にはイチゴのヘタが落ちていた。

「あ」

つるつ——効果音が聞こえ、竹田ジョンが廊下にあったゴミ箱を巻き込むくらいに盛大に転ぶ。

なんでだよおおおおおお！！

俺は内心でシャウトする。

意味分かんねえよ！

なんでイチゴのヘタで転ぶんだよ！

つかイチゴのヘタって本来転ぶものだっけ！？

バナナの皮は見切ったくせに、どうしてこれは見切れなかったんだ！

転ぶ、というよりすっ飛んだ竹田ジョンは痛つつ…と起き上がる。
当然凄まじい転びをしているのだから、廊下にいた他の生徒達は
何事かと集まっていた。

それに気がついた竹田ジョンは羞恥でさつと顔を赤くさせる。だが
がその後、まるで何事も無かったかのようにコホンと息をついて、
優雅に廊下を歩き去った。

だが背中にゴミ箱のゴミのバナナの皮が張り付いていて、どうに

も締まりがなかったが。

さて驚きだった休憩時間を終え、今は四時間目の授業に突入していた。

若い女の先生が片手にチョークを持ち、説明をしながら黒板に文字を書き足していく。すでに授業は終盤に入り、黒板の八割はびっしりと文字で埋まっていた。

今回は教訓を生かし、俺は黒板の板書をノートに走り書きをしていた。頭に内容は入ってはいないが、それでも何もしないよりはマシだろう。そんな考えで今に至っているのだが……

「すぴー……。すぴー……」
「……。」

> i 3 4 9 6 3 — 4 1 1 9 <

隣の竹田ジョンの寝息がとにかくうるさい。

教科書を見せて貰っているので席はくつついている。だからなのか余計に竹田ジョンの寝息が耳に入る。

うるさいなあ……。

少しウンザリした顔になりながら、顔を横に向ける。

隣の席には机に置いた腕に顔を埋めて眠っている竹田ジョンの姿があった。

「……………」

閉じられたまつげは長く、唇は艶のある桃色、前髪はサラサラで額を撫でる。

ね、眠っている時の顔は可愛いんだな……。

可憐の二文字がよく似合いそうな寝顔をしている。

心地よく寝ているのか、時折唇をむにやむにやと動かしている。

……口を閉じて何もしなければ、可愛いのかなあ……。あ、あと女の子だったらだけど。

じつとその顔を眺めていると、ちょびーとイタズラ心が湧いてきた。

鼻でもつまんでやろうかな……。

俺はイタズラ心に動かされ、音を立てずに少しずつ竹田ジョンに近づく。手を伸ばし、あと少しで届きそうになったところで、

ゲシ、という音がし、背中に衝撃が伝わった。

「…へ？」

予測できなかった展開に目を丸くする。

その衝撃の主は一体何だったのか目を動かしてみると、下の方で

ちらりと動く竹田ジヨンの足が見えた。

もしや竹田ジヨンが危険を察知して、俺を蹴った…？

再び竹田ジヨンの顔を見る。

「……むにゃ」

ぐっすりと眠っているようだ。

とても起きているようには見えない。

じゃあさっきのはたまたま……？

うーん、やっぱりたまたまだよね。そんな気づくなんてこと、いくらなんでも竹田ジヨンだからといってもそんな人間離れしたことはないよね。

俺は頭を振るい、気持ちの切り替えをする。

ま、そんなこともあるさ。

……うしし、ではもう一度と……。

もう一度手を伸ばし、鼻に近づいた時。

ドカァンッ——竹田ジヨンが俺を教室の反対側まで蹴っ飛ばした。

「ぐはっ」

俺はあまりの衝撃により、息ができなくなる。

クラスみんなが何事かと驚愕した表情を浮かべている。

記憶が薄れゆく中、竹田ジヨンの寝顔が視界にちらりと入り、そしてそこで俺の記憶は途絶えたのであった。

これは後で聞いた話なのだが、あの時竹田ジヨンは本当に寝ていたらしい。他の人に問われても、「さあ？」と本気で覚えのない様子であったそう。

保健室で目を覚まし、教室に帰ることを許された俺は竹田ジヨンのその状態と、破壊的な脚力を思い出し、身震いをしながら教室に向かうのであった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0943y/>

竹田と竹田と俺、竹田。

2011年11月17日21時24分発行